

世の終わりのための四重奏曲

児玉 桃 (ピアノ) とヨーロッパの仲間たち

曲目解説

フォーレ：ピアノ三重奏曲

1922～23年に作曲された、フォーレ最晩年の作品で、作曲家自身はこの曲を「小さなトリオ」と呼んだ。1924年に亡くなるまでの3年間に書かれたのは、本曲と弦楽四重奏曲のみ。しかし旋律は力強く、澄みわたるように迷いのない筆致は、老衰を微塵も感じさせない。3楽章からなり、最初の二つの楽章は穏やかな旋律が、ほのかな哀愁を帯びている。特に第2楽章の美しさは比類ない。終楽章はこれまでの気分を吹き飛ばすかのように、ヴァイオリンとチェロのユニゾンで激しく弾き出され、軽快なスケルツォを演出する。初演は1923年5月12日、フォーレ78歳の誕生日に若い音楽家たちによって行なわれた。

プーランク：クラリネット・ソナタ

プーランクはその晩年、管楽器のために3つのソナタを書き残した。フルート・ソナタ(1957)、オーボエ・ソナタ(1962)、そしてベニー・グッドマンの依頼により、死の前年(1962)に書かれた本曲である。全3楽章構成となっており、アイロニカルな旋律を身軽に歌い、甘い感傷に浸り、深い憂愁に沈むかと思えば、ユーモアに満ちた快活さを取り戻すという振幅の大きな音楽だが、特にリズムカルな第3楽章は、とても老境にあったとは思えない、瑞々しい感性にあふれている。

メシアン：世の終わりのための四重奏曲

本曲は、メシアンが第二次世界大戦中の1940年、ゲルリッツの捕虜収容所に収容されていたときに書かれたことから、「世界」の終末を描いた悲劇的な作品と捉えられがちだが、タイトルの「世」は、むしろ「時間」の意味である。敬虔なクリスチャンだったメシアンは、「ヨハネの黙示録第10章」の「もはや時がない。第7の天使がラッパを吹くとき、神の秘められた計画が成就する」という箇所を靈感を受け、救世主の不滅と再来を賛美する、祈りに満ちた本作を作曲した。全体は8曲から構成されるが、これは「天地創造の7日間の後に永遠の平安が訪れる」という意味による。また、収容所内の限られた楽器奏者を想定した作品だったため、ヴァイオリン、チェロ、クラリネット、ピアノという珍しい編成を採用している。